

2006 年1月
妙高集中(A班 前山)山スキー
事故経過報告書



東京南部 山スキークラブ ラ・ランドネ

妙高集中(A班 前山)事故経過報告書

2006年1月28日13時頃、新潟県妙高市の妙高高原・前山(標高1,932m)の1,800m付近で表層雪崩が発生し、当会の会員3名が負傷いたしました。

この事故に際し、多くの方々のご協力をいただき負傷者を迅速に病院へ搬送することができましたことに心からお礼を申し上げます。それと同時に、多くの方々にご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。

東京南部山スキークラブ ラ・ランドネ(略称 ラ・ランドネ)は、1983年に創立され、今年で23シーズン目を迎えました。会員は約60人で、年間50回ほどの山スキーを実施しています。妙高高原の前山へは、10年ほど前から毎年この時期に山スキー入るようになりました。

今シーズンは豪雪に見舞われ、例年と違った特別な注意が欠かせないと申し合わせた矢先の事故で、あらためて大自然の脅威を強く感じました。ラ・ランドネは今回の事故から多くを学び取り、教訓としてよりいっそう「安全最優先の山スキー」を追求していきます。

取り急ぎ、これまでに判明いたしました事故の状況等をご報告申し上げます。再発防止策をはじめとする当クラブの対応につきましては、改めて詳しくご報告させていただきます。

今後とも、よろしくお願い申し上げます。

2006年2月20日

東京南部山スキークラブ ラ・ランドネ

代表 矢口 政武

妙高集中(A班 前山)事故経過報告書

対象グループ及び氏名	妙高集中山行 1/28 A班 A(リーダー) B(サブリーダー) C(メンバー) D(メンバー) E(メンバー) F(メンバー) G(メンバー)		
山行計画ルート	関係各所へ提出した計画書内容 赤倉スキー場前山エリア最上部リフト(11:30)出発 →前山→滝沢尾根→1,000m沢越え→赤倉スキー場	現地11:00に変更した内容 最上部リフト(12:00)出発→前山(往復) ただし、雪の状況を見て適宜撤回の可能性大 変更理由 ・現地の雪が重すぎ、多すぎるため、メンバーの技量で滝沢尾根を走破できる見込みが少なかったため。 ・事故(雪崩、立木激突など)を起こした場合、帰還が困難となるため。	
事故種別	雪崩		
事故発生日時	2006/01/28 12:56雪崩発生		
気象状況	気温 高め(事故当時は氷点下ではなかったと考えられる) 天候 曇り(若干ガス有) 風 ほぼ無風 視界 50m以上 以上情報が報告者の感覚なので不正確な部分があります。		
事故発生場所	妙高前山(図.1事故現場写真、図.2事故現場付近地形図 参照) 赤倉スキー場前山エリア最上部リフト降り場より真西方向へ550m地点付近 標高1,760m付近		
規模	雪崩最上部:標高1,760m 情報提供:後続Sパーティー(13人)のS氏、NPO法人T氏 雪崩末端:標高1,570m地点より少なくとも100m(距離)下方 破断面幅:約100m 破断面厚:60~100cm 破断面部斜度:38度 二次雪崩の危険性:雪崩直後はありと判断した。		
被害者及び容態	C 左大腿部骨折 全治3ヶ月 G 右大腿部、右脛部骨折 全治3~4ヶ月 F 右鎖骨骨折 全治2週間		
事故状況	雪崩発生状況 A班7人で隊列して登行するも、登行ベースが異なるために、先行3人グループ(B、D、E)と後続4人グループ(A、C、F、G)に分かれての行動となる。既に複数パーティーが入山していたため、明瞭なトレースがあり、そのトレースを忠実に辿るも、急斜面でのターンに戸惑ったため、一歩トレースの先に踏み込むこととなった。その際、後続4人は団子状態となる。4人の重み、もしくはターンの振動で表層雪崩を誘発したと考えられる。 破断面は後続4人グループの上方10~20m付近 被害者らの状況 A とっさに、2~4m下方の樹木(約φ40cm)にしがみつき雪崩が収まるのを待つ。その際、雪煙にてメンバーの流されていく様子は一切確認できず。 C 20~40m下方の樹木に引っかかり停止 G 30~50m下方の樹木に引っかかり停止 F 標高1,570m地点にて停止(標高差約200m流される)停止時は左手の自由有、顔面は上空を向き軽く雪が掛かっていた程度 先行3人グループの状況 先行3人グループは数十メートル先行していたため、事故に気づかなかった。		
捜索連絡状況	捜索	連絡	
	12:56 雪崩発生 13:01 Aは自己脱出完了以降状況を大声+無線にて随時報告 13:02 Cの生存確認 Cの雪、スキー板、リュックによる圧迫状況を解除、滑落の危険回避措置、ビーコン解除に数分要する。 13:05 Gの生存確認 13:07 Cと同様の処置を施す 13:15 13:19 ビーコンにてFを捜索中のAと、雪崩末端へ急行するSが合流 13:20 後続のSパーティーのSが雪崩末端付近でFの生存確認 13:22	先行3人グループは救助要請の大声が確認できなかった。 赤倉山を登行していH班が緊急無線受信 このころ、A班の後ろを登って来た3人のWパーティーに大声が届く BとH班のリーダーH、神奈山へ向ったI班リーダーIと携帯電話にて交信、Hとより連山荘、在京に連絡 Wパーティーより、Sパーティーを経てスキー場/パトロール、警察、病院へ連絡 全員の生存連絡	
	タイムスケジュールは記憶の曖昧さがあるため、参考程度とされた。		

妙高集中(A班 前山)事故経過報告書

搬出状況	<p>13:50 C現場出発 搬出にはSパーティーのスノーボードを船にして牽引による(Bが付き添い)。</p> <p>14:05 G現場出発 現場の斜度が急すぎるためにCのような搬出方法をあきらめ、Sに担がれ滑走搬出</p> <p>14:10 Gゲレンデ・トップ到着</p> <p>14:35 Cゲレンデ・トップ到着</p> <p>14:45 Gゲレンデ・トップ出発 これ以降の搬送はスキー場バトロールに任せる。</p> <p>14:50 F自力でゲレンデ・トップ到着</p> <p>15:15 Cゲレンデ・トップ出発 これ以降の搬送はスキー場バトロールに任せる。</p> <p>15:20 G救急車にて搬送</p> <p>15:50 C、F救急車にて搬送</p> <p>タイムスケジュールは記憶の曖昧さがあるため、参考程度です。</p>
本山行の反省点	<ol style="list-style-type: none"> 1 同時期に過去10回以上辿っているコースであるので、判断に甘さがあった。 雪質、雪付は同じではない事を常に認識する必要があった。 2 事故現場手前の無木立緩斜面で、固いソラスト面に新雪が積もっているのを確認していた。 しかし、急斜面でのターンの際には、滑落の心配のみに気を配り雪崩の危険性は忘れていた。 3 登行中の隊列体制が前3人、後4人と別れ、その差が大きく開きすぎた。隊列の差が開く許容範囲は、直前直後が目視確認あるいは声伝達確認が出来る範囲とするべきである。 4 A班単独でのけが人搬出能力がなかった。(技術面、道具面両方とも) 5 登行のルート取りについて、ジグザグ幅が大きくなりすぎ、危険地帯に踏み込んでしまった。 ジグザグ幅を大きくすることにより、上り易さを優先し、雪崩の危険を軽視していた。 6 H班、I班に正確な事故現場を伝えられなかった。 <p>その他、今回の事故で学ぶべき教訓は多数ある。</p>
事故後の会の対応	<ul style="list-style-type: none"> ・ 臨時運営委員会(2006/01/30)が開催され、当面の対応が協議された。 ・ ランドネ運営委員会の採決で事故の補償、関係者へのお礼等のための補正予算が組まれた。 ・ 救出にお世話になった方、ご迷惑をかまいた現地の方々へ、1週間以内に会の代表もしくは代理が、お礼ご挨拶、事故の顛末の報告にあがった。
安全対策	<ul style="list-style-type: none"> ・ ランドネ定例会議(2006/02/08)で、安全対策委員会(名称は暫定的)を発足することが決まった。 ・ ランドネ運営委員会(2006/02/16)で、緊急安全対策全体会議(名称は暫定的)を2/25に、開催することが決まり、今後のランドネ会山行のあり方について協議することになった。
補足	<p>被害者捜索、搬出にお世話になった方</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 S氏が率いる13人パーティー S山岳スキーガイド 2 W氏率いる3人パーティー W氏はランドネ会員O、Pなどの親友

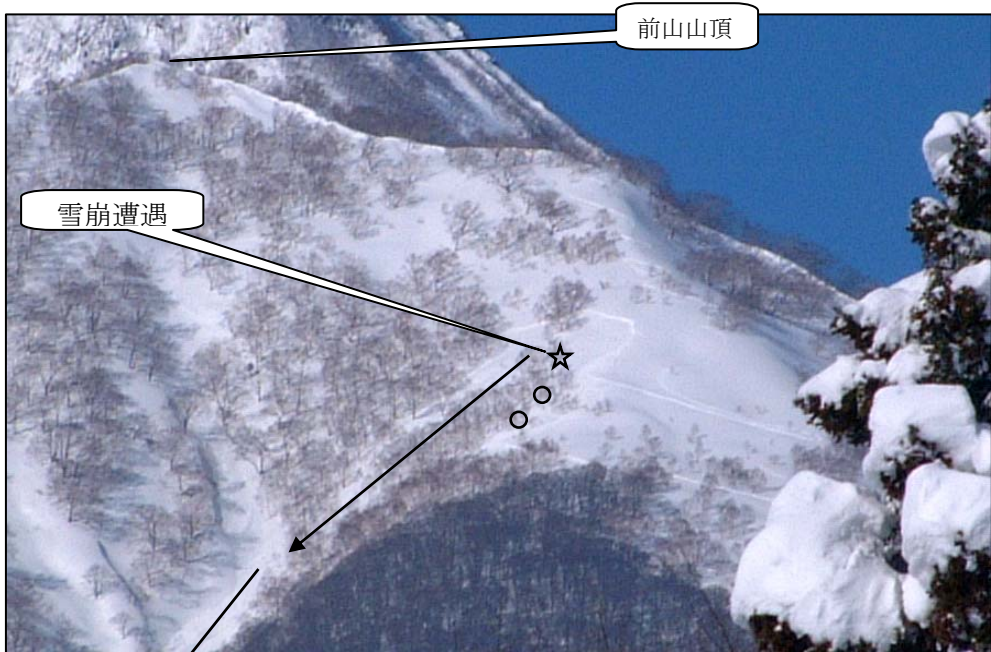


図.1 雪崩発生現場写真(連山荘よりN氏撮影 2005/01/29)

☆印:ダンゴ状態で、雪崩に巻き込まれた地点 矢印:雪崩進行方向

○印:負傷者C(上)、G(下)停止地点 負傷者F停止地点は写真外はるか下方

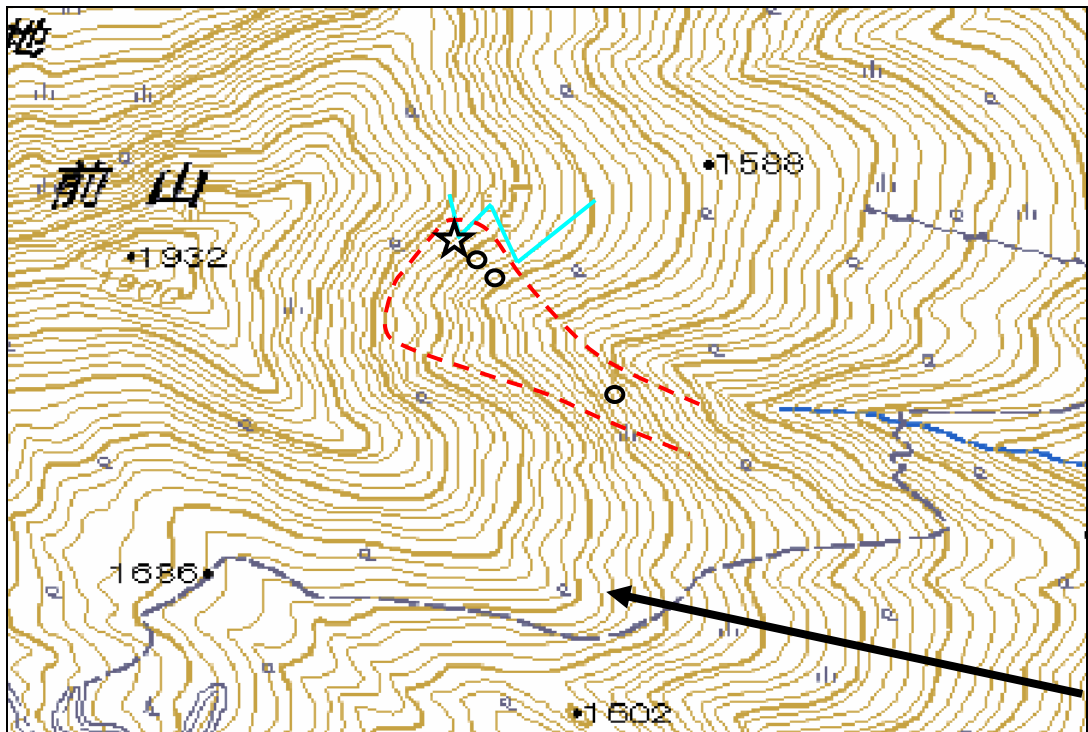


図.2 雪崩発生現場地形図

☆印:ダンゴ状態で、雪崩に巻き込まれた地点 ○印:負傷者C(上)、G(中)、F(下)停止地点

点線:雪崩範囲

ジグザグ:登行トレース

矢印:写真撮影方向



東京南部 山スキークラブ ラ・ランドネ
2006年1月

妙高集中山行(A班 前山)

事故経過報告書

発行日 2006年2月25日(土)

発行部数 80部